

泌 尿 器 科 紀 要

第 9 卷 第 10 号

昭和 38 年 10 月

随 想

両 親 学 級 に 出 席 し て

岩手医科大学助教授 大 堀 勉

子供は朝起きるのが早く、私が起きる頃は学校に出かける。そして私が病院から帰る頃は、子供は既に眠っている事が多いので、日曜日を除いてはゆつくり子供の相手をしてやることが出来ない。時々「〇〇君はいいなあ、パパとキャッチボールしたり、相撲とつたり出来るから」「うちのパパはどうしていつもいないの？」などといつて愚妻を困らすらしい。こんなことを聞くと子供が可哀想になり、せめて日曜日は相手をしてやろうと思うこともあるが、その日曜さえも何や彼やと家にいないことが多いから、自然子供のことはすべて愚妻まかせということになっている。多くの父親はおよそそういうものだと自分勝手にきめているが、子供にとっては全くもって無責任な父親である。こんなわけで日頃子供にはすまないと思っていたが、去る9月8日の日曜に、私の子供が通っている小学校で両親学級を開催したので、せめてもの罪ほろぼしと思つて出席した。私の子供は男の子2人で、5年生と1年生である。

午前10時から各学年それぞれの授業が始まったので、先づ5年と1年の授業を見てまわつた。子供達は元気がよくてみていて気持がいいものだ。また父兄を意識してか、いたずらする子供は見受けられず、みんな一生懸命であつた。日曜日のせいか父兄の数が多く、とくに男性が多かつた。授業そのものでは、僅か45分間でありとくに印象的なものはなかつた。勿論、私達の小学生時代とは教え方、その内容等可成り変つてきている筈である。ただ自分の子供がよく答えているのをみて気をよくしたのは、親馬鹿というものであろうか。午前11時からは各学年の父兄が全部小講堂に集まり講演を聞いた。子供の教育に関心があるためか、満員の盛況であつた。最初に学校長の挨拶、「子供の教育には家庭の協力が是非とも必要である。先生と父兄と緊密な連絡をとり、成果をあげるよう努力したい。両親学級についてアンケートを求めたところ **week-day** は父親が仕事の関係で出席出来ないから、日曜に行なつて欲しいとの希望が多かつたので、本日月曜と日曜をふりかえて実施したが、予想外に多数の御参加を得て嬉しい」旨話された。続いて県教育主事某氏の講演であつた。題は国語の学習についてで、約1時間半にわたつて講演された。その内容を要約すると、(1)国語に誇りを持って、そして正しい国語を知る必要がある。(2)「書ける」ということと「読める」ということの説明。(3)学校における指導、並びに家庭における指導の方法。の3点であつた。この3点について、いろいろな例をあげ、又専門的なこともおりまぜて、丁寧にわかり易く、非常に熱の入つた講演をされた。父兄の方も最後迄熱心に聞き入つた。正しい国語といわれると一寸不思議に思えるが、簡単な例では、「上」という字の書く順序を父兄に尋ねられたが、父兄の約2/3は間違つていた。このように字の書き方だけでなく、間違つていても気付かずにいる場合が非常に多いことを指摘され、子供と一緒にもう一度勉強しなおすべきであると強調されたのである。更に講演で最も強調されたことは、理解しておぼえさせるという

ことであつた。例えば、一つのことばをおぼえる場合に、そのことばの意味を理解し乍らおぼえるとただ暗記するよりはおぼえ易く、そして忘れることも少ないということである。又、文章を読む場合は、どういうことを言っているのか考え乍ら読ませるようにすると、要点を把握する力などが育成されるというわけである。最近の教科書、或は試験問題などをみると、私達の頃とは全く様相が変つているが、これは勿論、上述のごとく「理解させる」「考えさせる」ような方針で専門家がつくつたものであり、誠に立派なものであると思う。このような方針で教育された子供達は、やがて私達とは違つてもつと考える力の豊富な大人になり、もつと立派な社会をつくるに違いない。ほんとうにそうなることを望んでやまない。然しここで一寸考えなければならないことがある。というのは、このような教育がはじめられてから10年以上経つた今日、実際問題としてどうであつたかということである。学力とは何であるかという問題は別として、いつか、最近の学力低下は甚だしいというような新聞記事を読んだこともあり、最近でも岩手県下の学力低下が問題となつている。自分の子供が就学していない頃は、さほど実感が湧かないが、子供が5年生位になると親として放つておけないような感じになる。一体何故に学力が低下したのだろうか。ふりかえつてみると、戦前の私達の小学校の頃は、科目により多少異なるが、全般的に「おぼえる」「暗記する」教育であつたように思う。それが戦後一変して「理解する」「考える」指導方針になつたわけである。たしかに「理解する」「考える」ことは、ただ「暗記する」よりも一歩前進したわけで、前述のごとく理論的には望ましいことであるが、それにもかかわらず学力の低下を招いたのは、「理解する」「考える」ことに重きをおき過ぎたことが一因ではないだろうか。すなわち、戦前の教育に批判が加えられて戦後の教育がはじまつたのであるが、その戦後の教育にも漸く批判が加えられるときが来たのではないかと思われる。父兄として来られた某教授が討論に立たれ、「理解しておぼえるということは大へん結構なことだが、或程度何でも覚える、暗記することも必要だ。子供は暗記力が強いから何でも暗記させることが出来るものだ。暗記していると逆に理解出来ることもあるのではないか。テレビにたとえると、部品が揃つていると多少さし違つてもうつるけれども、部品が揃わないとうつらない。つまり、知つていれば読むことが出来るし、読めれば何とか意味がわかることもある。」というような趣旨で面白く話されたので一同笑つたが、全く同感であつた。要は、暗記するにせよ、理解するにせよ、とにかく大いにトレーニングしなければならない、努力しなければならないということである。子供に努力させるにはどうすればよいか、すなわち家庭における指導の方法については、また非常にくわしく、いろいろな例をあげて説明されたが、結局、親は、子供が努力出来るような環境を積極的につくつてやるべきであるということであつた。

有意義な講演を聞いて、家庭における子供の指導というものがいかに大切であるか、そしてまた、親の責任の重大さを今更乍ら身に泌みて感じ、いろいろと反省させられた次第である。

両親学級に出席して感じたままを書きならべましたが、拙文の点は何卒御寛容下さい